

『楚辞』と『日本書紀』——へこえから「文字」へ——

目次

序に代えて——偽書ということ——	1
第一章 『日本書紀』成立の経緯——「日本記」などは、かたそぼぞかし——	7
一 「旧辞」について	8
二 『日本書紀』成立過程——「先代舊事本紀」と「古事記」——	13
○ 「記録」ということ	15
◇ 『日本書紀』成立過程図	卷末
1 諸家之所賞帝紀及本辞	18
2 天皇家の「本辞（旧辞）」↓稗田阿礼誦習	22
3 『古事記』太安万侶撰録	23

4	『帝紀1』～『帝紀n』	25
5	『日本書紀』の「一書曰」	25
6	本辞(旧辞)	26
7	再度、『古事記』太安万侶撰録	27
8	『先代舊事本紀』(天皇家の「帝紀」)	30
9	『古事記』から『日本書紀』への八年間	32
	三 関連諸事項を追って	41
1	「推古紀」廿八年の「記録」	41
	◇『日本書紀』関連年譜	43
2	「天武紀」十年三月十八日の記録	48
3	再度、『帝紀』について	56
4	再度、『古事記』について	67
5	「記」と「紀」——「応神記」と「応神紀」	76
四	『日本書紀』の書名について	81

第二章 『楚辞』は、いかなる作品群か——文辞並発、故世伝楚辞

	前書き——第一章との関連を通して	100
	一 『楚辞』成立の経緯	104
1	『史記』初出の「楚辞」という語	104
2	『漢書』における「楚辞」と「楚詞」	108
3	『史記』における「楚辞」	110
4	『楚辞』の成立過程	112
	A 屈原	112
	B 淮南王安と嚴助・朱買臣	113
	◇『楚辞』成立関連図	卷末
	C 司馬遷	121
	D 王褒と九江被公	122
	E 劉向	125
	F 班固	126

G 王逸	128
二 古典化してゆく『楚辞』	133
○ 「作」とは、どういうことか	133
◇ 『楚辞』内在化変容図	卷末
○ 「改易」という語	136
○ 作懐沙之賦其辞曰	140
○ 「九歌」	143
○ 「天問」	144
○ 「九章」	144
○ 「招魂」	145
○ 「遠遊」	147
○ 「招隱士」	149
○ 『楚辞章句』の一面	155
○ 賈誼	156

○ 宋玉	159
○ 孫卿賦	164
○ 僧道騫——叶韻か方言か	166
三 『楚辞』が翻訳文学であることの一証左——人称代名詞を中心に	174
1 伝統的自称代名詞	174
2 「武鳴土語」と「貉語」の漢字表記	176
◇ 『ウエベケレ集大成』図版	177
◇ 武鳴造字法一覽	178
◇ 『武鳴土語』図版	182
◇ 『広西貉歌記音』図版	186
3 『楚辞』が翻訳文学であることの痕跡——自称代名詞を中心に	188
4 特に「我」について	199
◇ 『楚辞』関係年譜	223

後書き

索引

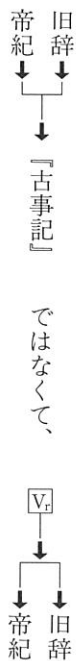
序に代えて——偽書ということ——

凡そ大抵の偽書は、著者が生前にその書かきおこしたものである。其の書かきおこした書物は、著者が生前にその書かきおこした書物である。其の書かきおこした書物は、著者が生前にその書かきおこした書物である。

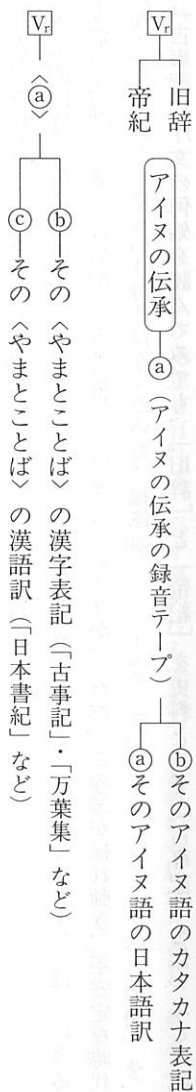
（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が並ぶ）

一 「旧辞」について

従来の『古事記』成立に関する論には、「旧辞」と「帝紀」とを史料として編纂されたとする先入観が、根強く支配していました。そうして、「旧辞」「帝紀」に関する研究に、多くの時間が費やされて来た。それにもかかわらず、今もなお、定説といわれるものが見られず、後から後から多くの見解が提出されています。しかし、筆者の考えるところからすれば、このような解釈は、あり得ないばかりか、こういう前提で考究されているからこそ、多くの論が頻出して来たのだと言っても、決して過言ではない。「旧辞」と「帝紀」を史料とし、それを合わせて『古事記』を作るなどということは起りようがない、と筆者は言いたいのです。話を進めていくに従って、自らこのことが明らかになっていくと思われませんが、結論を先に言いますと、



ということになるでしょう。この図は、先に示した「漢字文化圏を考える時の公式」に、よく似ています。それと重ね合わせてみましょう。



本来、こういう関係図を基本において、『古事記』成立論は、展開されるべきであったのです。

一つの集団がいかに微々たる存在であっても、その集団の「記録」を必要とするでしょう。「記録」なきところに集団を考えることは難しい。まして組織と秩序とによって経営される一つの「国家」において、その主権者とそれを取り囲む人間関係の空間的・時間的記録がなくては、一日たりとも経営は不可能となるはずです。つまり「歴史」が不可欠であり、「歴史」の中心をなすものは「王朝の歴史」、主権者と、それを取り巻く権門の家々の歴史です。そうして、これらの「歴史」には、「記録」が不可欠です。

こう考えたとき「記録」は、どのようにして作られるものか。そのためには如何なる手段方法が有り得るかと考えてみる必要が生じて来ます。現代においては、多種類の記録の手段が駆使されていますが、千数百年の昔に遡る事件です。現代の記録の手段をもってしても、十分な記録を望むことは不可能なのです。遠い過去から現代に至るまで、いわゆる文字が記録の手段として優れた能力を持っていたことは、誰も疑うものではありません。しかし、今更言うまでもないことですが、記録の手段